

詠 詠 集

四 月 号



花鳥諷詠®

令和3年4月■第397号 ————— 目次



花鳥諷詠選集	稲畑 汀子	2
	大輪 靖宏	4

第三十二回日本伝統俳句協会賞

受賞者のことば	7
選者評	8
選考経過報告	14

第三十三回花鳥諷詠賞

虚子研究 虚子宛書簡を読む（二十一）

明治二十四年七月十八日虚子宛碧梧桐書簡

（托封書 宛名記入のない無地封）	小林 祐代	16
------------------------	-------------	----

一頁の鑑賞	池田雅かず	22
	吉田 有子	23

この人の作品	亀岡亜紀子	24
--------------	-------------	----

公告 令和三年度事業計画と予算書	25
------------------------	----

風報	30
----------	----

地区行事開催日程表	31
-----------------	----

編集後記	32
------------	----

花鳥諷詠選集

稲畑汀子選

特選五句

誰も来ずどこへも行かず三ヶ日

福岡 深瀬 直治

除雪車の音頼もしくありがたく

北見 山崎 肆子

大鍋を片付け終へて年の夜

北本 鈴木 麻子

雲が雲追ひかけてゆく寒さかな

熊本 粟津 玲子

ものぐさの支配下となる炬燵かな

神戸 大西 芙紗子

二句短評

一句目——新年を迎え、三ヶ日の過ごし方はその家によってそれぞれである。家族が久しぶりに集まる家、新年を旅先で過ごす家族。今年は例年とは違ってコロナという病気が流行り、旅を辞め、実家にも帰らない家族も多かったと聞く。今年の句として記念すべき新年の一句とするには、如何にも淋しいが、それもまたいいのではないか。コロナ騒動も早く収まってこれまでの開放的な日々が早く戻ることを祈るばかりである。

二句目——北海道、東北を初めとする雪国の豪雪には、その地にすむ方々にとつて大変なことであったに違いない。雪の無い地に住む我々からは想像の出来ない困難な日常であったのであろうとお見舞いする。除雪車をとんなに有り難いと思われたか、雪除けのために来た音が聞こえて来た時の喜びと安心感が素直に一句となったのである。

入選六十句

日当りに杖が見つけし冬すみれ 松山 篠原みどり

水鳥の水尾より暮れてゆく湖面 芦屋 勝田 展子

夜を打つ雨に加はる虎落笛 白山 大橋美代子

書くことは考へる事初仕事 宗像 井上真知子

静寂のつつむ華やぎ冬桜 高崎 清水 教子

うっかりもまた美しき帰り花 福岡 黒田 純子

山茶花の散るを惜しまぬ盛りかな 兵庫 松下 孝裕

午後からは本格的な雪となる 久留米 野口 桂子

太陽のかけら華やぐ薄氷 糸島 春田美智子

マスクして人は表情なくしけり 福岡 今中 榮泉

埋火に遠のく風の音であり 神戸 平田 恵

炬燵して家族の会話増えて来し 金沢 矢木 桂子

お隣がこんなに遠く雪を掻く 鳥取 長安 節子

暖かや言葉に添へてまなざしも 名古屋 波多野富代子

日だまりの咲かせてをりし冬すみれ 大牟田 介弘 紀子

曖昧を許さぬ青さ冬の空 高崎 門倉 博子

何となく師走と思ふだけのこと 大牟田 介弘 浩司

これ以上出来ぬ省略枯木立 鹿児島 柳橋かずみ

年輪を火にして櫓の崩れたる 熊本 井芹真一郎

湖平ら人の動けば鴨もまた 高松 新谷 榮子

帰り来ぬ子がまだ一人大晦日 福山 広川 良子

看取妻牛の世話もし年暮るる 江津 安田 心道

一舟も見ぬ大寒の湖の黙 高島 貫野 浩

冬晴をなほも研ぎゆく風なりし 高松 渡部 全子

ある時は雪を愛でたり恐れたり 千曲 瀬在 光本

波の音までも耀ふ初明り 福岡 山口 裕子

雲凍てて薄墨色にかたまりぬ 高松 池田 裕子

街騒の消えて凍てつく夜の街 高松 久本 照代

水仙の少し離れてより香る 羽生 塩田 章子

頼らるる事のまだあり冬ぬくし 那珂川 池田ひさ絵

灯を消してより風音を聴く夜寒 堺 杉山千恵子

読初や指針の一書虚子俳話 高松 織田 雅子

降り止まぬ雪の音聴く夜の底 富山 武田 律子

ポケットに逃げてしまひし悴む手 姫路 上原 康子

主婦留守の厨に寒さありにけり 糸島 川上 清子

免許証手放す朝の雪の道 北九州 吉富 堯峰

ころんだら句座に出られぬ雪の道 福岡 吉田 文代

風音に後れて木の葉しぐれかな 十日町 富井千鶴子

臘梅の明日待つつ心一輪に 茨木 田邊 育子

新雪といふも一夜に卸すほど 長岡 安原 葉

一面のどこかが揺るる枯尾花 松山 三好美美枝

凍てきびしどこか軋めるわがくらし 高松 白根 純子

冬椿母に甘えのなき暮らし 芦屋 奥田 好子

長ぐつの沈むくらると告げる雪 福知山 植村太加成

一湾の凍てて波音とどめけり 四日市 伊藤 和子

日向から日向へ移る初音かな 神戸 小柴 智子
 訪ふ里の見えゐて遠き冬野道 石川 駒形 隼男
 好天のすとんと暮れて星冴ゆる 伊賀 北村 みち
 春近し動き出したる好奇心 高松 もりおかともこ
 あるがまま生きるよろこび日脚伸ぶ 久留米 矢野 愛子
 常といふ日々の尊し初暦 神戸 明石 裕子
 挨拶の顔の語つてゐる寒さ 東京 小作 紀子
 福笹の歩調に合はせ揺れてをり 大阪 山田 天
 雪礫投げて分かりし左利き 米子 中村 襄介
 浅間嶺に雲の変幻寒に入る 大阪 吉川 弘美
 赴任地に買ひし雪靴役に立ち 岐阜 武井 勉子
 それとなく聞きたき本音炭を足す 春日 本田 久子
 答案に挑むマスクの眉目かな 東京 岡田 圭子
 枯蔓を引けば逆らふ力あり 井原 片山 千代
 新しき年改まる志 金沢 西田 梅女

●大輪靖宏選

特選五句

枯菊を手折りし音の軽さかな

神戸 鴨川 加奈子

潮の香も温泉の香も灰とある賀状

大分 村上 久子

貼り替へし障子の匂ふ四畳半

松山 丹 経子

父母ありてこそそのふるさと冬銀河

東京 坂口 祐子

授乳せし背に底冷せまる真夜

指宿 難波 真由美

二句短評

一句目—— 枯菊を折ったときの微妙な感触が把握されている。盛りの時の菊の手応えを知っているからこそ、今の感触が真に軽く感じられるのだ。「軽さかな」という嘆声には命のなくなった菊に対する哀れみを込めた気持ちもある。

二句目—— 年頭に届いた賀状を見ると、そこにいろいろな味わいがある。そこに感じる懐かしさや雰囲気香りを香りでもって表現しているため実感がある。温泉は「いでゆ」「ゆぜん」などの読み方があるが、ここは「ゆ」と読む。

入選六十句

日当りに杖が見つけし冬すみれ 松山 篠原みどり

散り急ぐことなく散りて冬桜 高松 金沢 正恵

心にもありし底冷父の逝く 名古屋 中野ひろみ

行年の箒大きく使ふ巫女 八王子 小町谷滋子

饒舌は終り寡黙な冬紅葉 東京 清水千鶴子

水鳥の水尾より暮れてゆく湖面 芦屋 勝田 展子

バツハ弾き今年静かな大晦日 稲城 森本美紀子

省くだけ省きひとりの大掃除 西宮 柄川 武子

公魚の天ぷらさくとほろ苦し 仙台 赤間 学

心まだ伝へきれずに年暮るる 高山 原田 尚子

遥拝の一山牙ゆる滝の音 富田林 尾崎 千鶴

椀につぐとき香のほのと蕪汁 生駒 南 純子

香と遊びゆつくり浸る柚湯かな 長崎 山脇 順子

太陽のかけら華やぐ薄氷 糸島 春田美智子

マスクして人は表情なくしけり 福岡 今中 榮泉

誰がためにいとしむ命齋粥 高松 福家 敬子

枯尾花風素つ気無く過ぎてゆく 金沢 小幡 道子

生かされてゐるしあはせの賀状書く 大分 野村香代子

開き戸の隙間にもある今朝の春 高松 福濱 政美

寒紅を濃く心身を鎧ひけり 高山 大下 雅子

曖昧を許さぬ青さ冬の空 高崎 門倉 博子

凜としてあなたはあなた冬薔薇 熊本 宗像 和子

一舟も見ぬ大寒の湖の黙 高島 貫野 浩

乾きたる音蹴散らして枯葉道 堺 新田佐代子

埋火にそつと火箸を入れてみる 柏原 鈴木兵十郎

お年玉今日おとなしき膝小僧 白山 鈴木 恵子

枯草にまだ残りぬし氣息かな 浜田 福本 正巖

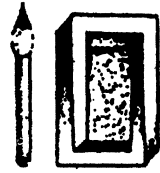
水仙の少し離れてより香る 羽生 塩田 章子

雨戸繰り雪の朝となりにけり 萩 藤田 克弘

愛犬の逝きし孤独や霜降る夜 金沢 三島由紀子

白寿の師米寿の弟子や去年今年 稲城 尾上英美子
 菰中に仄かな香り寒牡丹 長岡 内藤 孝
 大波を乗り上げてゆく鴨一羽 草津 竹内 恵子
 寒燈を一つ灯して一人の餉 香川 三宅久美子
 寒禽の一声渴の風凜と 金沢 村本寿美枝
 寒菊や父の遺愛の信樂に 富田林 中住 笛美
 御向ひの小さな子より賀状来る 三木 内田 幸子
 その中にまじりて初音らしきもの 熊本 西村 孝子
 笑む嬰の握り締めたる初湯かな 神戸 齊木 富子
 古壁に定位置ありし初曆 伊賀 光岡代里子
 滝凍てて水の威力の固まれり 八尾 窪田由紀子
 好天のすんと暮れて星冴ゆる 伊賀 北村 みち
 霜柱ふんで健脚確かむる 熊本 吉田 潮
 着脹れて口の達者な大女将 成田 阿部ひろし
 あるがまま生きるよろこび日脚伸ぶ 久留米 矢野 愛子

敷き藁を蹴つて春待つ孕み馬 高知 伊野部哲也
 咲かぬまま朽ちゆくものも冬薔薇 高知 中村 梅子
 福笹の歩調に合はせ揺れてをり 大阪 山田 天
 こんな夜は母の口伝のおでん鍋 稲沢 藤本 慈子
 外したるマスクたちまち饒舌に 福山 早間 幸枝
 福寿草活けて床の間改まる 大分 福嶋ただし
 穏やかな犬の寢息や燐焔燃ゆる 大分 峯戸松祥子
 全身に時を止めて滝凍つる 倉敷 中田 鈴江
 出来立てのさらりと旨き齋粥 島原 池田みを子
 リハビリの杖の歩みや山笑ふ 岡山 大野 文子
 それとなく聞きたき本音炭を足す 春日 本田 久子
 古墳訪ふ靴沈みゆく落葉径 今治 比留木のぶ子
 鼻歌で家事の捗る冬日和 豊中 北橋 梟子
 枯蔓を引けば逆らふ力あり 井原 片山 千代
 雪女振り向きさうな白き闇 福岡 工藤 友子



編集後記

曲家の火伏の神も爐火埃

汀子

令和三年度の第一号をお届けしました。表紙も汀子会長のこの句に代わりました。色も少しでも明るい気持ちになれますよう変更いたしました。一年間よろしくお願ひします。

●今月号より六月号まで、年会費の振込用紙を綴じ込んであります。口座引落の手続きをされていない方は、六月までにお振込みをお願いします。

●書面開催した令和二年度第二回理事会で承認された令和三年度の事業計画

年会費の口座振替 (口座自動引落し)の 手続きをされている方へ

令和3年度会費 口座振替のお知らせ

2月までに手続きを済ませている方は、下のとおりご指定の口座より振り替えさせていただきます。

振替日	4月12日(月)
年会費	10,000円
手数料	160円
合計	10,160円

- ★口座のご確認等よろしくお願ひします。
- ★残高不足の場合は引落し不能となり、別途お振込みをお願いします。(振替手数料をいただく場合があります)
- ★来年度からの口座振替をご希望の方は、12月より受付ます。詳細は後日誌上にてお知らせします。

と予算案を今号にて報告しております。ご確認ください。

●今年度第一回常務理事会は書面での協議を進めています。同理事会も書面開催の予定です。任期満了による役員改選が議題となる六月の総会は小規模にて開催、九月の全国大会も残念ながら参集は断念いたしました。

今年度も我慢の年になります。できることをひとつずつこなしていきたいと存じます。

(須川)

花鳥諷詠四月号(通巻第三九七号)

定価二五〇円(但し、本代は年会費を含む)

年会費一〇,〇〇〇円

令和三年四月一日

発行人 稲畑 汀子

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二丁目一八九

シャンブル笹塚二丁目B一〇一

電話 〇三三四五五五五一九一

FAX 〇三三四五五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇一七二八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一丁目一九二